

関山遺跡 II

SEKIYAMA SITE II

中央自動車道上野原インターチェンジ建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(道路公団部分)

1988. 9

山梨県教育委員会
日本道路公団



関山遺跡 II

SEKIYAMA SITE II

中央自動車道上野原インターチェンジ建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(道路公団部分)

1988.9

山梨県教育委員会
日本道路公団

序

本報告書は、中央自動車道上野原インターチェンジの建設に先立ち、1987年度に発掘調査された山梨県北都留郡上野原町関山地内の関山遺跡について、その結果をまとめたものであります。

この遺跡の位置する上野原町は、山梨県の最東端にあって、神奈川県との県境をなしております。遺跡の南側を流れる桂川は、山中湖に源を發し、相模湖を経て相模川となり、太平洋へと注いでおりますが、この川によって形成された河岸段丘上には原始・古代より営々とした人々の営みを示す遺跡が多く分布しております。当地域は、古代において相模国と境を接する甲斐国東端の地域でもあり、「和名抄」に記載される都留郡の古郡・都留の2郷と福地郷の一部に属していたとされ、当時のくらしの様子を現代に残る遺跡や遺称によって窺うことができます。

今回発掘調査を行なった関山遺跡は、この様な歴史的環境のなかに存在し、当初から縄文時代及び平安時代の集落などの存在が推定されておりました。既に報告されている『関山遺跡』Iでは、当インターチェンジ県道部分で調査された縄文時代の住居址1軒、配石遺構1基、集石遺構2基、土壙16基の内容を明らかにしましたが、本報告書はその東側約13,000㎡を発掘調査した結果を記したものであります。発見された遺構はわずかに土壙が6基、近代の貯蔵穴が1基でありましたが、遺物は縄文時代中期から晩期におよび、付近に長期間にわたる断続的な人間活動があったことが明らかになりました。本報告書が、多くの方々の研究と文化財保護のために利用していただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1988年9月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例 言

1. 本報告書は、山梨県北都留郡上野原町字関山地内に所在する関山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、中央自動車上野原インターチェンジ建設に伴う事前調査で、山梨県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施した。
3. 発掘調査および出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターが行ない、同機関文化財主事長沢宏昌、中山誠二が担当した。
4. 本報告書の執筆、編集は中山が行なった。
5. 遺構・遺物の写真撮影は、中山・塚原明生（日本写真家協会会員）が行なった。
6. 遺跡内出土の石器鑑定は帝京大学山梨文化財研究所地質・火山灰研究室長河西学氏による。
7. 遺跡内の火山灰分析は帝京大学山梨文化財研究所に依頼し、河西学氏に分析結果の報告をいただいた。
8. 本報告書に係わる出土品および記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
9. 発掘調査から報告書作成に至るまでに、同町内の田中久彌氏、長谷川孟氏にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

目 次

序

例言

第 I 章	調 査 状 況	1
	第 1 節 調査に至る経過	1
	第 2 節 調査組織	1
第 II 章	遺 跡 概 況	2
	第 1 節 遺跡の位置と周辺の環境	2
	第 2 節 調査区域の設定と調査方法	4
第 III 章	遺 構 と 遺 物	8
	第 1 節 遺構	8
	(1) 土壌	
	(2) 貯蔵穴	
	第 2 節 遺構外出土遺物	13
第 IV 章	地 質 調 査	20
第 V 章	ま と め	25

凡 例

1. 本書の遺構・遺物の挿図縮尺は原則として次の通りである。
遺跡位置図 1/50,000、調査区域図 1/3000、遺構配置図 1/400、土壌 1/40、土器拓影 1/3、小型石器実測図 2/3、打製石斧・磨石等 1/3、大型石製品 1/6
2. 遺構挿図内の水系レベルは海拔高を示す。
3. 遺物の記述・挿図について
石器実測図のスクリーントーンは磨り面を表す。

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3	第10図	貯蔵穴内出土遺物	13
第2図	調査区域図	5	第11図	遺構外出土土器	14
第3図	1区遺構配置図及びハード・ ローム面掘り下げグリッド	6	第12図	石鏃・その他	16
第4図	2区ハード・ローム面掘り下 げグリッド	7	第13図	打製石斧 (1)	17
第5図	標準土層	7	第14図	打製石斧 (2)	18
第6図	土壌 (1)	9	第15図	関山遺跡の柱状図、粒径 組成、火山ガラス・軽鉱 物・重鉱物組成、火山ガ ラス含有率、および重鉱物組成	22
第7図	土壌 (2)	10	第16図	陥穴の分類	25
第8図	土壌内出土遺物	11			
第9図	貯蔵穴	12			

表 目 次

表1	周辺の遺跡一覧	4
表2	石鏃一覧	19
表3	打製石斧一覧	19
表4	関山遺跡のテフラ分析計数粒数	21

図 版 目 次

図版1	関山遺跡上空航空写真
図版2	標準土層・作業風景・1区全景・2区全景
図版3	1号土壌・2号土壌・3号土壌・5号土壌・1区東側トレンチ・風倒木痕
図版4	6号土壌・貯蔵穴
図版5	出土遺物

第 I 章 調査状況

第 1 節 調査に至る経過

- 昭和62年 2月13日 県文化課と第1回打合せを行なう。
- 昭和62年 3月 6日 文化庁に発掘通知を提出する。
- 昭和62年 5月 7日 日本道路公団と山梨県教育委員会の間で発掘調査に関する委託契約を締結する。
- 昭和62年 5月 8日 第1期発掘調査を開始する。
- 昭和62年 6月22日 第1期調査を終了する。
- 昭和62年 7月13日 日本道路公団・県文化課・県埋蔵文化財センターとの打合せを行なう。
- 昭和62年 7月17日 日本道路公団・県文化課・県埋蔵文化財センター・県土木部との打合せを行なう。
- 昭和62年 8月 3日 第2期調査を開始する。
- 昭和62年10月21日 第2期発掘調査を終了する。
- 昭和62年11月 6日 上野原警察署に遺物の発見通知を提出する。
- 昭和62年12月21日 委託契約内容を変更する。
- 昭和63年 3月16日 日本道路公団・県文化課・県埋蔵文化財センターとの打合せを行なう。

第 2 節 調査組織

- 調査主体 山梨県教育委員会
- 調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
- 調査担当者 長沢宏昌・中山誠二（上記機関文化財主事）
- 調査員 小林安典
- 作業員 高野俊彦・津田元栄・荒井一郎・山下芳信・鷹取睦雄・村野利夫・和智幹一・
檜島信子・市川好子・中村林太郎・荒井泉・長田増雄・星野晃・荒井貞・杉
本チカエ・戸田杉子・水越茂子・佐藤淑恵・滝口成子・山田早苗・塚原佳津
子・横森輝子・久島順子（順不同）
- 整理員 内藤真千子・石川操・弦間千鶴・松野和美・後藤良美・和田宏美・柏木まつ
江・新津重子
- 調査協力 上野原町教育委員会・上野原町インター対策室

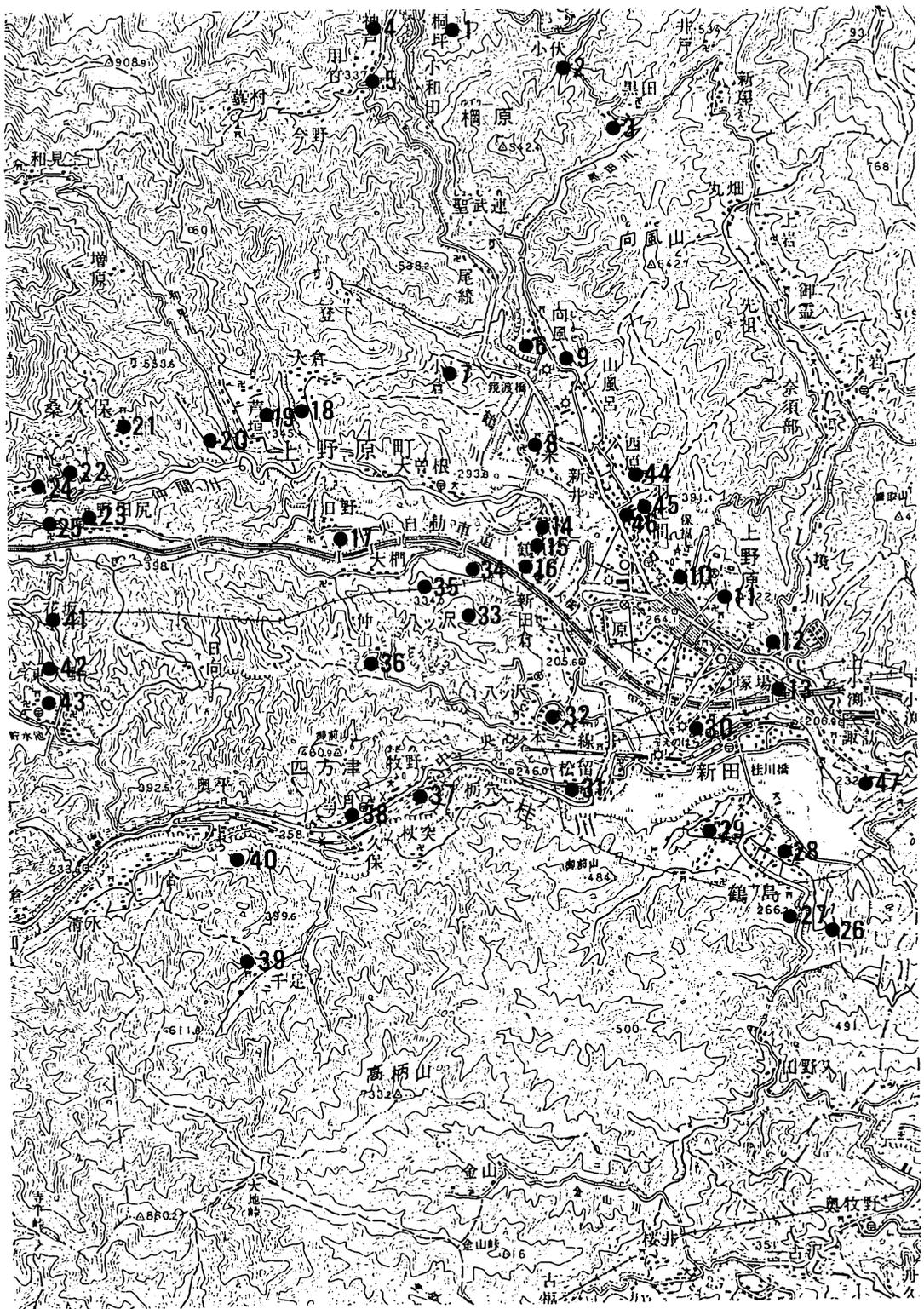
第Ⅱ章 遺跡概況

第1節 遺跡の位置と周辺環境

関山遺跡は、山梨県北都留郡上野原町関山842他に所在する。遺跡は、山中湖に発した桂川（相模川）によって形成された河岸段丘の中位段丘面にのり、標高250メートルを測る。遺跡の南側は現在の桂川が流れる下位段丘面を望む断崖となっており、その比高差は約80メートルにおよぶ。また、遺跡西方には鶴川が南流し、桂川と合流している。

関山遺跡を載せる中位段丘面は上野原面と呼ばれ、付近ではもっとも平坦な地域をなすが、遺跡の分布はその後背部の山麓と段丘面との接点にそって上野原小学校遺跡（10）、根本山遺跡（11）、桜ヶ丘遺跡（12）、塚場古墳群（13）等の縄文時代、古墳時代の遺跡が認められている。また、遺跡対岸の鶴島においては縄文時代、弥生時代、平安時代の遺跡が点在する（26～29）ほか、鶴川右岸の中位段丘面にも縄文から古墳時代の遺跡（14～16）が存在する。この様に、同町内の遺跡は桂川、鶴川の河岸段丘面にもっとも多く分布し、それ以外は狭隘な山間部のわずかな平坦面や緩斜面に営まれる場合が多い。より巨視的に見れば当地は中部山岳地方と南関東地方の接点とも考えられる。原始・古代における文化の流れや文化圏の接触を捉えるうえで重要な地域であるともいえる。

ところで、周辺に於いて甲斐国と相模国との境に位置し、都留郡の古郡（ふるごおり）郷に比定されている地域である。「和名抄」によれば平安時代都留郡には相模・古郡・福地・多良・賀美・征茂・都留の7つの郷が記されているが、古郡は初期の郡家が存在しそれが移転した後に付けられた遺称であると考えられている。一説によればこの古郡を都留市の古川渡に比定する考え方もあるが、現段階ではやはり上野原町内とする説が強い。同地の牛倉明神の慶長6年や元和8年の棟札に「古郡上野原村」と見え、同町和見に臨濟宗古郡山江月寺があり、上野原の本町の南西に建暦3年和田の乱に加担して滅ぼされた古郡左衛門尉保忠の館跡と伝える所があるなど郷名関係の遺称がこの地域に多いことが郷名比定の根拠となっている。この地域の西側には都留郷、福地郷に比定される地域が存在し、桂川流域に展開した古代の集落を遺跡の分布状況から窺うことができる。



第1図 遺跡位置図

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期
1	椿和田遺跡	
2	小伏(穴沢)遺跡	縄文中期
3	黒田東遺跡	縄文中期
4	用竹(神戸)遺跡	弥生時代
5	用竹(殿村)遺跡	縄文早・中・後期
6	向風2遺跡	縄文後期・平安時代
7	小倉遺跡	縄文早期
8	八米遺跡	縄文時代
9	向風第1遺跡	縄文前期
10	上野原小学校遺跡	縄文中期
11	根本山遺跡	縄文中期・後期
12	桜ヶ丘遺跡	縄文時代・古墳時代
13	塚場古墳群	古墳時代
14	上の山1遺跡	縄文後期
15	上の山古墳	古墳時代
16	上の山2遺跡	縄文中期・弥生後期
17	日野富士塚遺跡	縄文早期～中期
18	大倉遺跡	縄文前・中期
19	芦垣遺跡	縄文前・中期・平安時代
20	瀬淵遺跡	縄文早期
21	平呂遺跡	縄文中期
22	中風呂遺跡	縄文中期
23	野田尻1遺跡	縄文・弥生・平安時代
24	西不老遺跡	縄文中期・古墳時代

番号	遺跡名	時期
25	野田尻2遺跡	古墳時代
26	黒の木遺跡	縄文中期・後期・平安時代
27	田代遺跡	縄文中期
28	東区遺跡	縄文中期
29	駒門遺跡	縄文中期・弥生後期
30	関山遺跡	縄文時代・平安時代
31	松留遺跡	縄文後期
32	八ッ沢遺跡	縄文中期
33	大柵2遺跡	縄文早期
34	大浜遺跡	縄文中期
35	大柵1遺跡	縄文中期・後期
36	仲山遺跡	弥生時代
37	牧野遺跡	縄文中期・平安時代
38	当月遺跡	縄文前期・中期
39	千足遺跡	縄文時代
40	河合遺跡	縄文中期
41	花坂遺跡	縄文前期・古墳時代
42	中屋根遺跡	縄文時代・奈良時代
43	東大野遺跡	縄文中期
44	西シ原遺跡	縄文早期・前期
45	大堀2遺跡	縄文早期・前期・中期
46	大堀1遺跡	縄文中期
47	狐原遺跡	縄文中期・弥生後期・古墳時代

『全国遺跡地図 山梨県』文化庁 1981による。

第2節 調査区域の設定と調査方法

本遺跡の調査範囲は上野原インターチェンジ建設部分の約13,000㎡の地域であり、調査区の南側には段丘崖が迫っている。調査区域は1区が東西に180mと長く、南北の幅は30～50mを測り、2区が東西50m、南北40～50mを測る。この調査区域全体に4m×4mを単位とするメッシュをかけ、グリッドを設定した。グリッドの表記方法は、調査区の南西端を起点に西から東(X軸)

に算用数字の1・2・3……、南から北（Y軸）へアルファベットのA・B・C……の杭番号を設定しグリッド南西杭を起点としてY-Xグリッドとする。

調査はまず対象地域全体の表土を削除し、遺構確認のための精査を行なった後遺構の発掘を行なった。遺構の調査終了後さらに1区において150グリッド、2区に於いて42グリッドの遺構確認面の掘り下げを行ない（第3図右）、ローム層中の先土器時代の遺物、遺構の検出作業を実施したが該期のものは発見されなかった。

遺跡を載せる段丘面は、桂川によって運ばれた礫層面の上に、火山灰等の風成堆積物が約5mほど覆い現在の生活面を作り出している。今回の調査ではもっとも深いところで表土から3mを測り、堆積土は基本的にI層からX層に分けられる。その特徴は以下のとおりである。

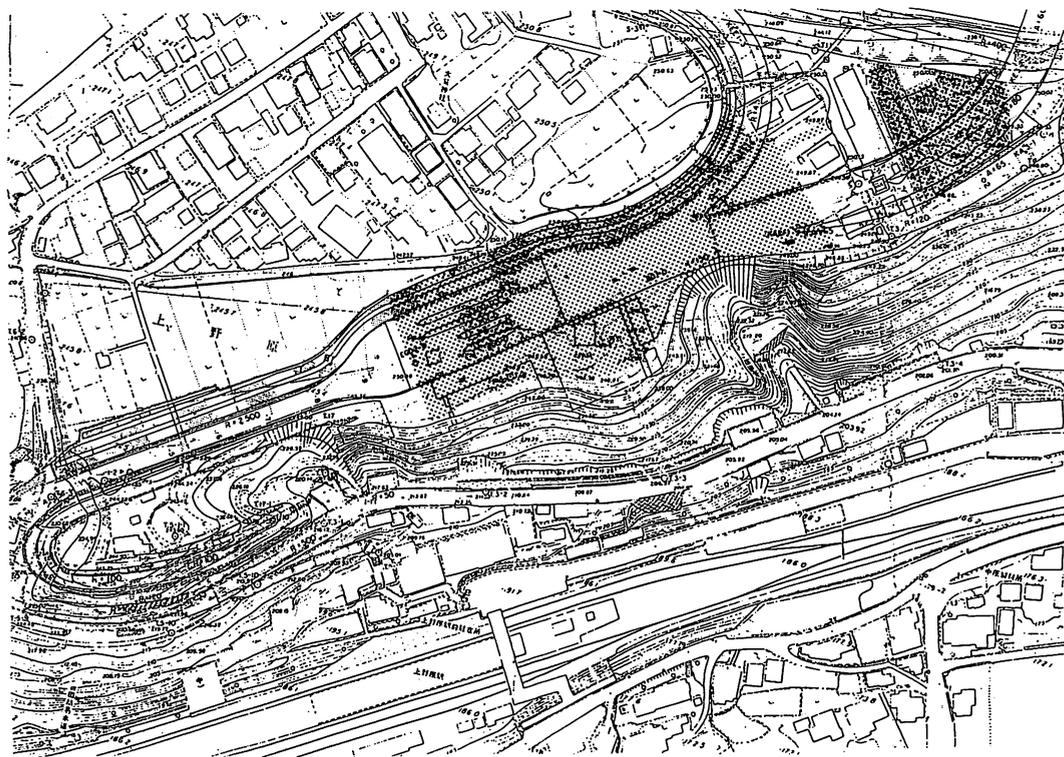
I層：耕作土。

II層：黒色土。

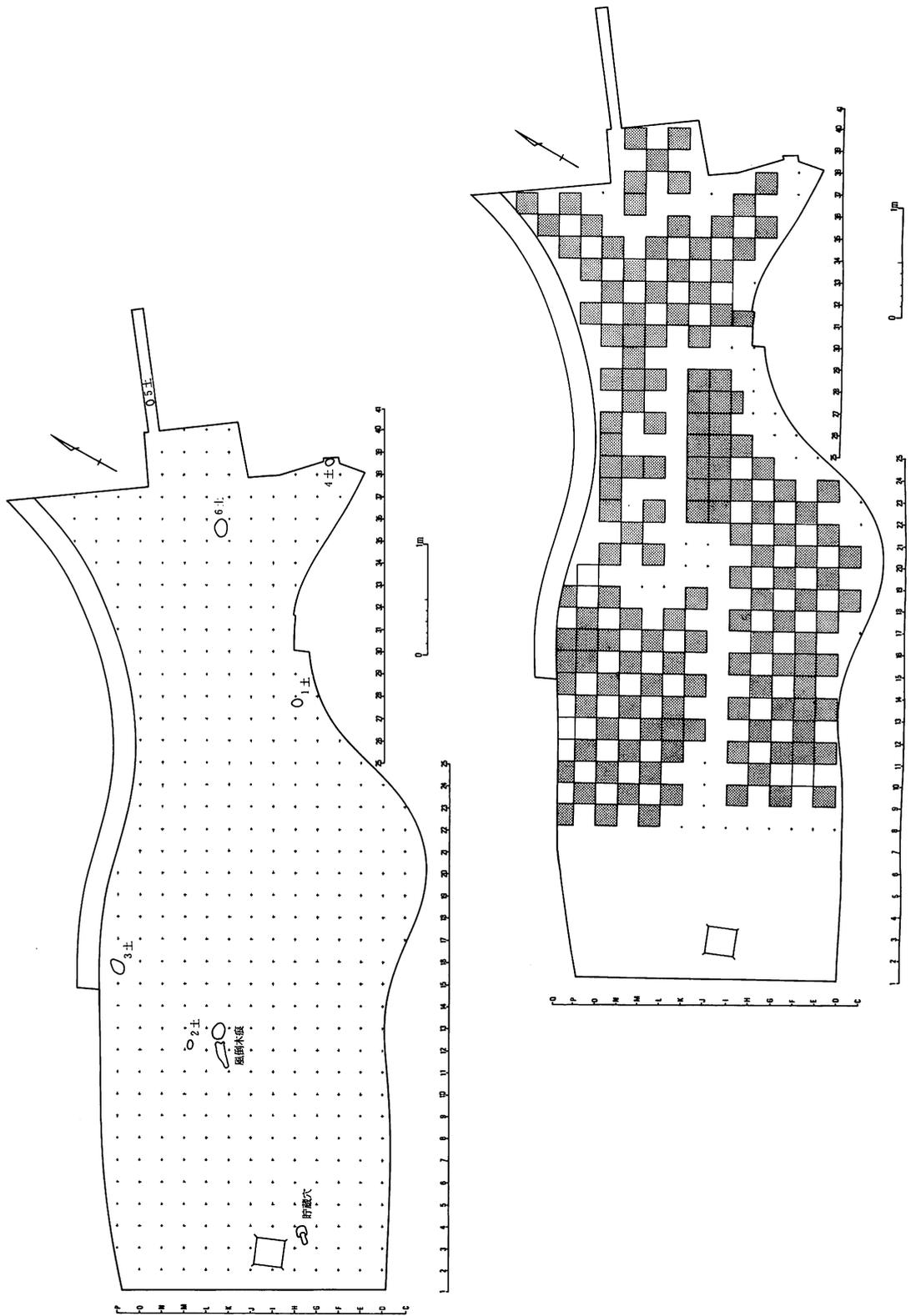
III層：黒色土・1mm大の赤色スコリアを含む。

IV層：黒褐色土・5mm大の赤色スコリアを含む。

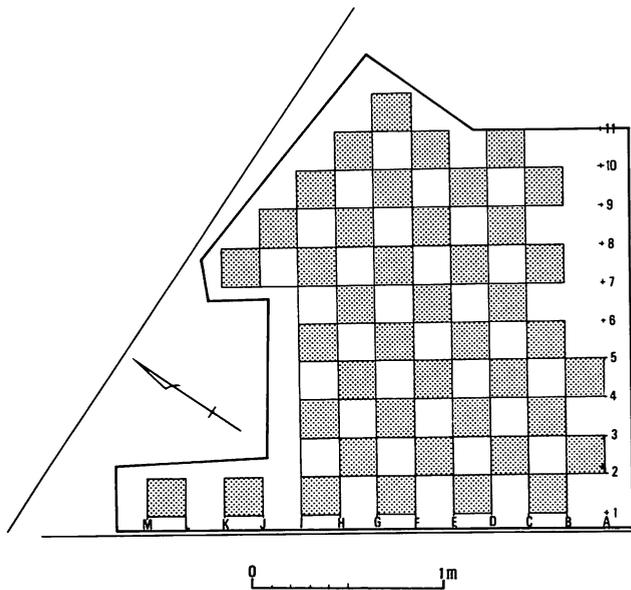
V層：暗褐色土・5～10mm大の赤色スコリアを含む。



第2図 調査区域図



第3図 1区遺構配置図及びハード・ローム面掘り下げグリッド



第4図 2区ハード・ローム面掘り下げグリッド



第5図 標準土層

VI層：暗褐色土+黄褐色土・5mm~10mm大の赤色スコリアを含む。

VII層：黄褐色ローム層・10mm大の赤色スコリアを多量に含む。

VIII層：黄褐色ローム層・10mm~20mmの赤色。黒色粒子をブロック状に多量に含む。

IX層：黄褐色ローム層・10mm大の黒色粒子を含む。

X層：黄赤褐色ローム層・10mm大の黒色粒子、赤色スコリアを含む。

本調査区西側の県道部分調査区における土層調査では、V層に該当する暗褐色土が認められず、堆積の状況が若干異なっている。

第Ⅲ章 遺構と遺物

今回発掘調査された遺構は、1区、2区あわせて土壌6基、近代の貯蔵穴1基、風倒木痕2カ所が検出されたのみである。土壌の位置は調査区の中に散在的に存在し、規則的な配置は認められない。遺物は、基本層序のV層～VI層の縄文時代の遺物包含層から出土している。

第1節 遺構

(1) 土壌（第6図）

1号土壌（第6図1）

（位置） G～H-17グリッドに位置する。

（形状・規模） 長軸1 m50cm、短軸1 m35cmの楕円形を呈し、深さ45cmを測る。土壌底部は、やや傾斜し、壁はやや斜めに立ち上がる。

（出土遺物） 本土壌からは30点余りの縄文土器破片が出土しているが、その内有文のものについては拓本を掲載した（第8図1～9・12）。

1は刻みを持つ隆帯をめぐらし、その下部に沈線と縄文を施す。2～8・12は磨り消し縄文を特徴とする深鉢破片。口縁部内面は沈線と円形刺突文を持つ。焼成は良好、色調は淡茶褐色である。

土器の特徴から縄文時代後期中葉の堀の内式に比定される。

2号土壌（第6図2）

（位置） L-2グリッドに位置する。

（形状・規模） 長軸1 m30cm、短軸90cmの不整形を呈し、深さ40cmを測る。壁は北側がほぼ直立し、南側が緩やかに立ち上がる。

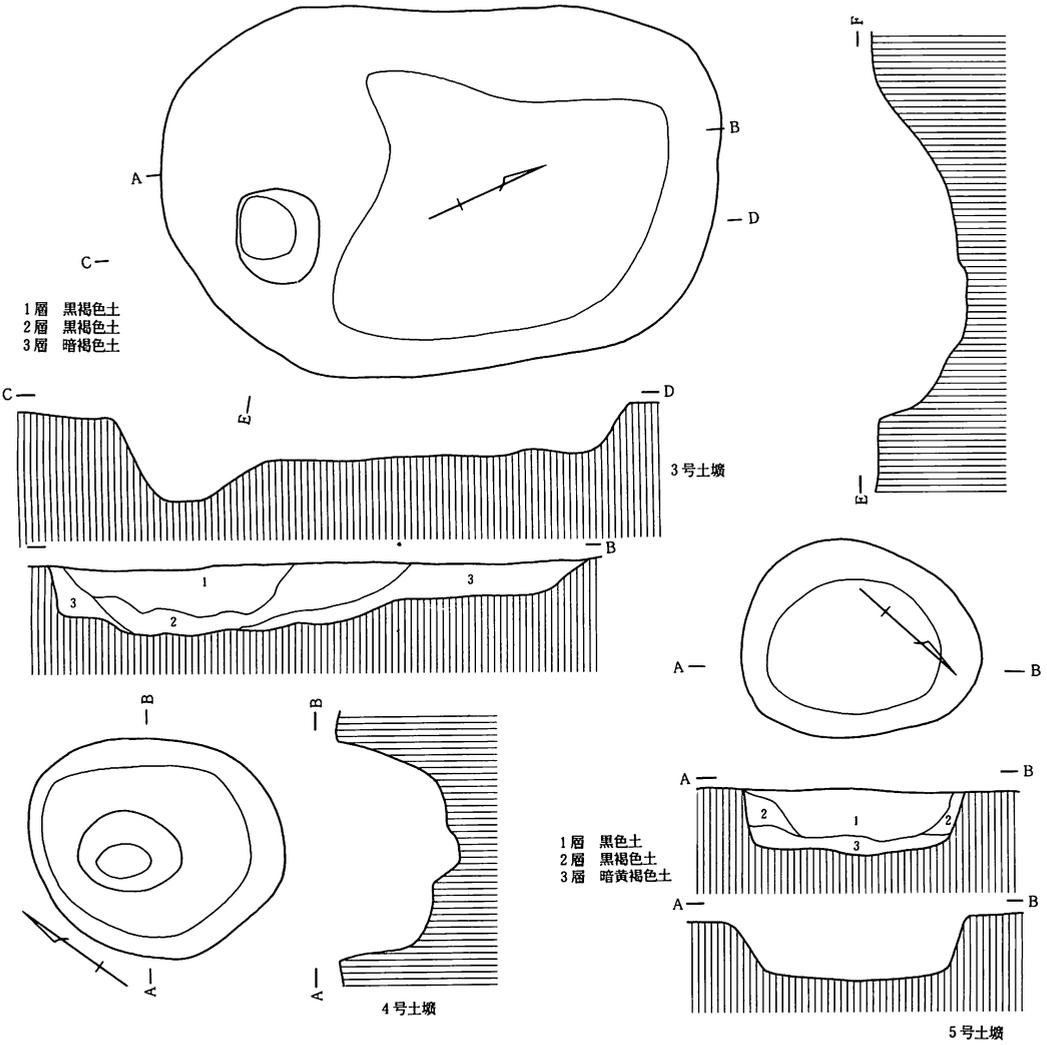
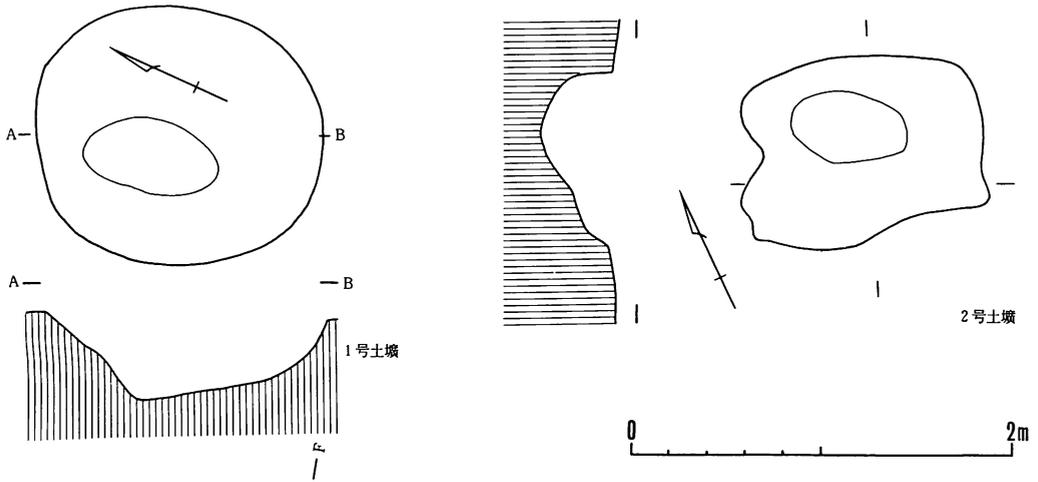
（出土遺物） なし。

3号土壌（第6図3）

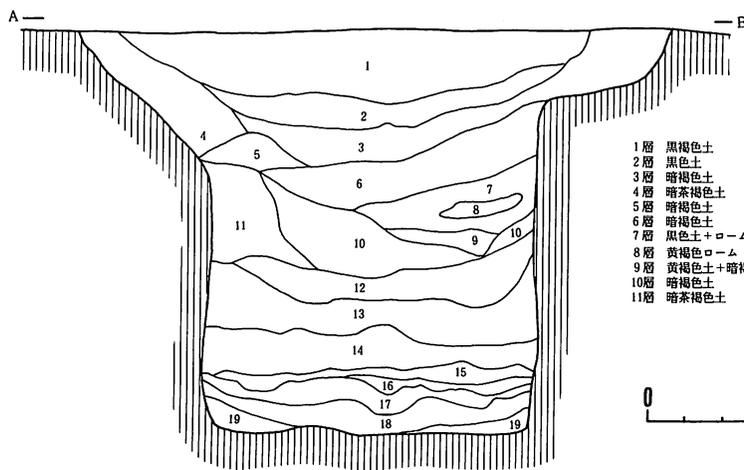
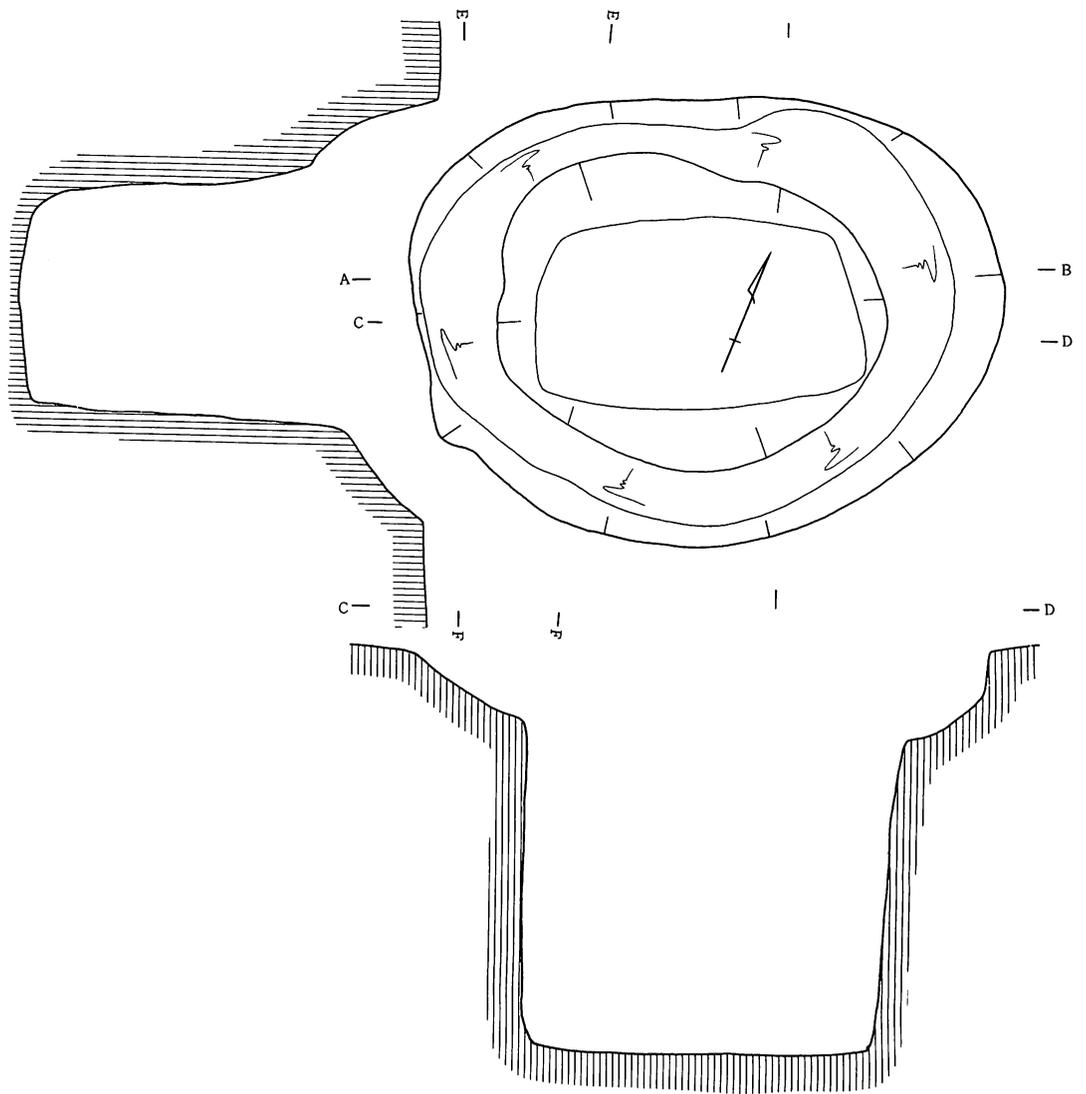
（位置） O～P-5グリッドに位置する。

（形状・規模） 長軸2 m90cm、短軸1 m90cmの長円形を呈し、深さ30cmを測る。土壌底部はほぼ平坦で、南側にピットを持つ。

（出土遺物） なし



第6图 土壤 (1)



6号土坑

- | | |
|----------------|-------------------|
| 1層 黒褐色土 | 12層 暗褐色土+黒褐色土 |
| 2層 黒色土 | +ロームブロック |
| 3層 暗褐色土 | 13層 黒色土+ロームブロック |
| 4層 暗茶褐色土 | +暗褐色土 |
| 5層 暗褐色土 | 14層 暗黄褐色土+ロームブロック |
| 6層 暗褐色土 | 15層 黄褐色土 |
| 7層 黒色土+ロームブロック | 16層 黒褐色土 |
| 8層 黄褐色ローム | 17層 黄褐色土+暗褐色土 |
| 9層 黄褐色土+暗褐色土 | 18層 暗褐色土 |
| 10層 暗褐色土 | 19層 黒褐色土+ロームブロック |
| 11層 暗茶褐色土 | |



第7図 土 壤 (2)

4号土壙（第6図4）

（位置） F-28グリッドに位置する。

（形状・規模） 長軸1 m 35cm、短軸1 m 20cmの楕円形を呈し、深さ50cmを測る。土壙の中央部に小ピットを持つ。

（出土遺物） なし。

5号土壙（第6図5）

（位置） N-31グリッドに位置する。

（形状・規模） 長軸1 m 30cm、短軸1 m 5 cmの卵形を呈し、深さ35cmを測る。土壙底部は平坦である。

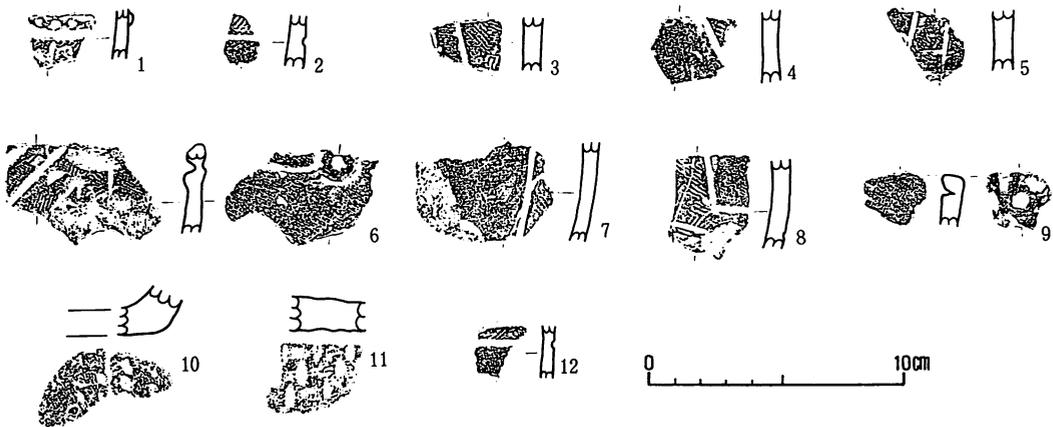
（出土遺物） 網代痕を残す土器底部破片が2片出土している（第8図10・11）。出土土器の時期は縄文時代後期と考えられる。

6号土壙（第7図）

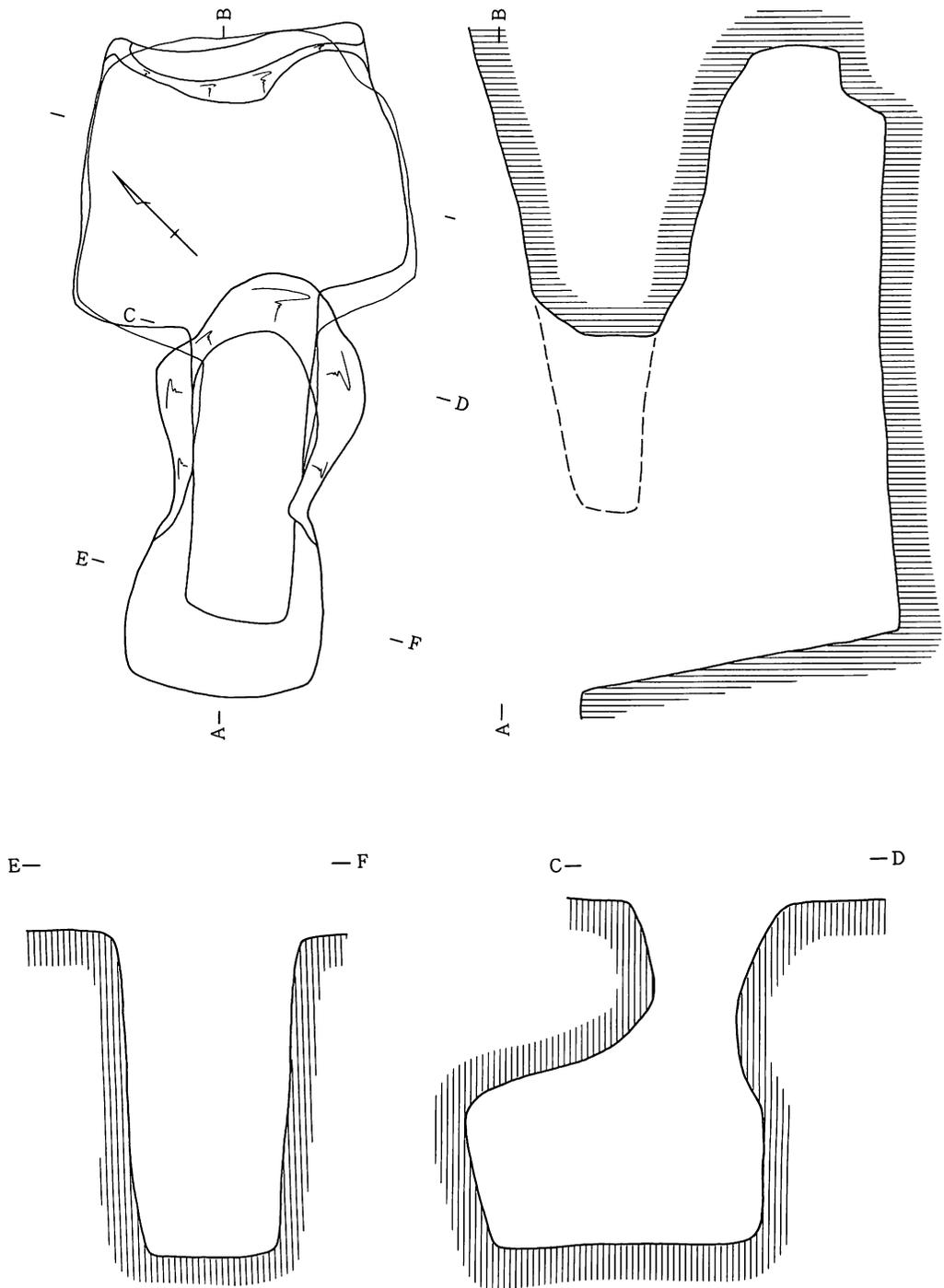
（位置） K-25グリッドに位置する。

（形状・規模） 長軸3 m 10cm、短軸2 m 30cmの楕円形を呈し、深さ2 m 10cmを測る。土壙の上部は摺り鉢状に緩やかに立ち上がり、その下部はほぼ直壁をなす。土壙底部は平坦で、その直上にロームブロックを含む黒色土、暗褐色土が上部から崩落したように堆積する。土壙の形状、深さから動物捕獲のための陥穴と考えられる。

（出土遺物） なし



第8図 土壙内出土遺物



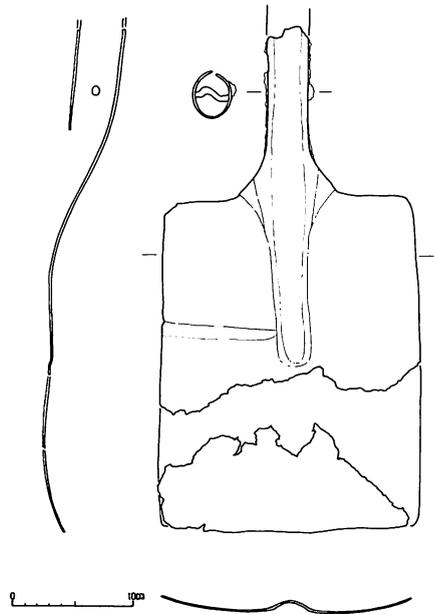
第9图 贮藏穴

(2) 貯蔵穴 (第9図)

(位置) A地区西端部のG-7グリッドに位置する。

(形状・規模) 入口部分に1m80cmの竪坑が掘られ、底から東方向に3m40cmの横坑が通じる。入口部分の崩落が激しいが、本来は1辺1mの正方形を呈していたと推定される。この部分の断面形態はほぼ直壁で、貯蔵室への出入りは梯子によって行なわれていたと考えられる。横坑は、入口部から貯蔵室に至る導入部が幅60cm、長さ1m70cmを測り、貯蔵室に至る。貯蔵室は1辺2m程の方形を呈し、奥壁部に幅20cm程のテラスを有する。貯蔵室入口には木枠による扉の痕跡があり、横坑の中に開閉のための扉が存在したらしい。坑内の天井部分には、掘削時の工具痕が明瞭に残る。

(出土遺物) 竪坑の底部付近より角型スコップが1点出土している。柄及び木質部は既に腐食して失われているが、先端部の鉄質部が残存する。先端部は、幅21cm、長さ28cmを測る。

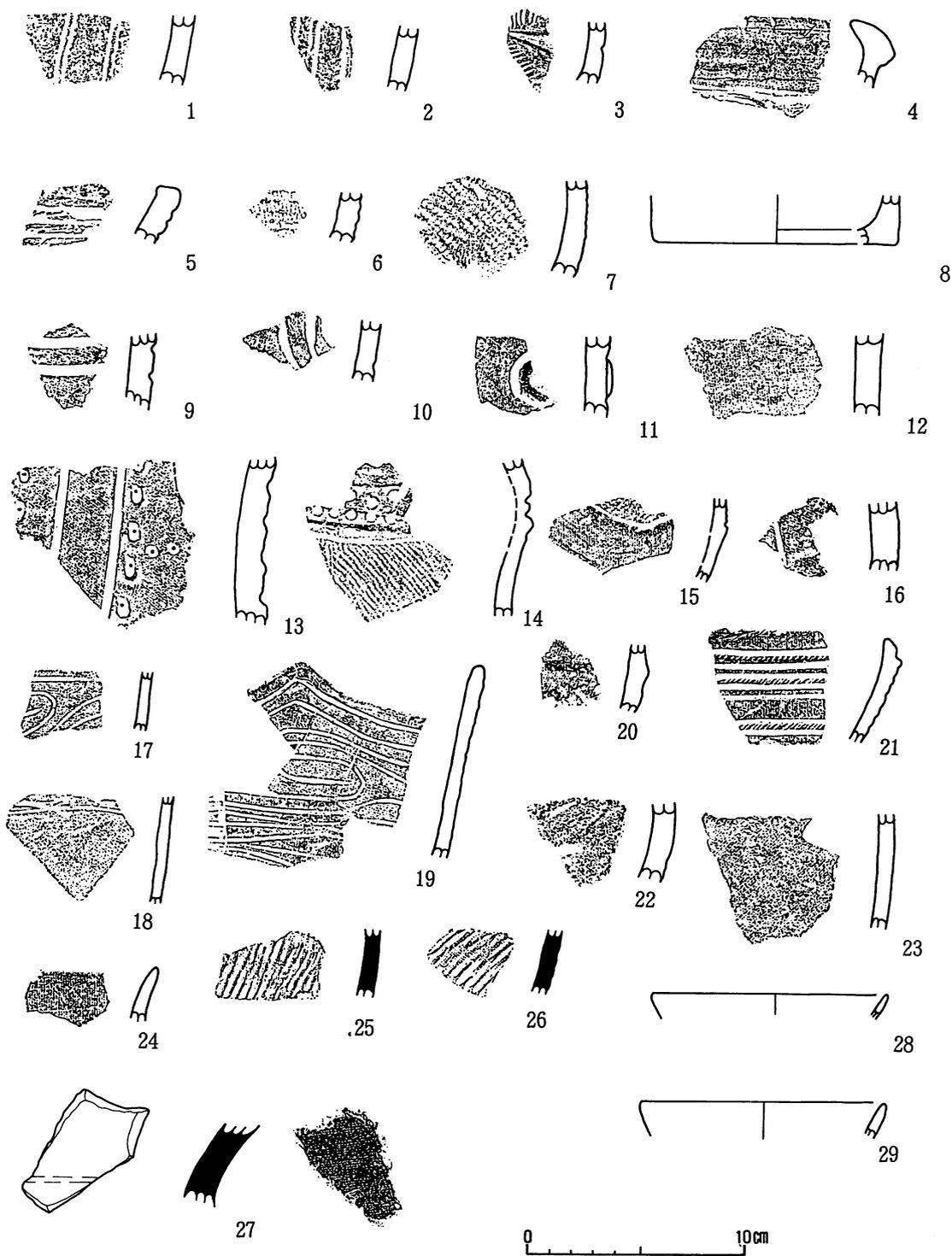


第10図 貯蔵穴内出土遺物

第2節 遺構外出土遺物

(1) 土器 (第11図)

1・2. 半截竹管による縦位の平行沈線文を施す深鉢破片。1は1区C-2グリッド、2は1区0-20グリッド出土。 3. 三叉文と連続爪径文を施す土器破片。1区L-4グリッド。口縁部がやや肥厚し、内側に屈折する深鉢口縁部片。1区0-21グリッド出土。 5. ヘラ状工具による深い平行沈線をめぐらした深鉢口縁部。1区N-5グリッド出土。 6. RL縄文を施す土器破片。3区P-5グリッド出土。 7. RL縄文を施す深鉢破片。2区G-8グリッド出土。 8. 無文の深鉢底部破片。1区N-12グリッド出土。 9. 竹管背部による平行沈線を施す土器破片。1区表土出土。 10. 竹管背部による曲線的な平行沈線を施す土器破片。9と同一個体と考えられる。1区I-25グリッド出土。 11. 隆帯と竹管背部による円形または渦巻き文を施す。1区R-26グリッド出土。 12. 深鉢胴下半部破片。1区L-26グリッド出土。竹管背部による縦位の平行沈線文と竹管先端部の刺突による列点文を特徴とする深鉢胴部破片。1区表土出土。 14. 口縁下に竹管刺突による列点文、胴部に細かいLR縄文を施す深鉢破片。1区表土出土。 15. 沈線と縄文による文様を有する土器破片。1区表土出土。 16. 竹管背面による沈線を施す土器破片。 17~19. 波状口縁を持つ深鉢土器。沈線による渦巻き文を特徴とする。いずれも1区東側のトレンチ内出土。 21. 口縁部がやや内湾する深鉢



第11图 遺構外出土土器

口縁部で、横位の沈線を7条巡らす。沈線によって浮き出た隆起部分に刻みを施す。2区表土出土。20・22・23. 無文土器。いずれも2区出土。24. 壺形土器口縁部。外面及び内面に赤色塗彩を施す。1区0-23グリッド出土。25・26. 外面にタタキ目を残す須恵器。1区M-5グリッド出土。27. 須恵器甕頸部。外面に灰色の自然釉を残し、内面に褐色の釉を施す。1区0-4グリッド出土。28・29. 土師器の坏口縁部。3区-26グリッド出土。

以上の土器のうち、1・2は縄文時代中期初頭の五領ケ台式期、3・4が中期中葉の藤内式期、5～8が井戸尻式期、9～16が後期初頭の称名寺式、17～19が晩期初頭の清水天王山式期、21が後期後葉の加曾利B式期にそれぞれ比定される。20・22・23の無文土器は焼成・胎土から縄文土器と判断されるが、詳細な時期は不明である。24は弥生時代後期の土器と考えられる。25から29の土師器及び須恵器はおおよそ平安時代に比定される。

(2) 石器 (第12～14図)

① 石鏃 (第12図1～16)

1区及び2区から16点の石鏃が縄文時代の遺物包含層から散在的に検出されているが、遺構に伴うものは1点も存在しない。石材は16点中11点が黒曜石4点がチャート、1点が珪質凝灰岩である。形態的には、凹基無茎鏃が12点と最も多く、有茎鏃2点、平基無茎鏃2点と続く。欠損品は6点存在し、欠損部位は脚部3点、頂部3点である。

② 打製石斧 (第13・14図)

打製石斧の出土点数は17点で、うち完形品4点、欠損品13点と欠損品が圧倒的に多い。これらの打製石斧は、石鏃同様縄文期の遺物包含層から散在的に出土したもので、遺構に伴うものはない。

打製石斧の形態は一般的に短冊形、撥形、分銅形に大きく分類されており、本書でもこれにしたがって分類し一覧表にした。短冊形7点(第13図4・5・8～10、第14図12・16)、撥形2点(第13図3・6)、分銅形5点(第13図2・11、第14図13・17・18)、その他は欠損部が多く分類できない。大きさは長さが10cm前後のものと、20cm前後の大型品に大きく別かれるが、大型品は短冊形と分銅形に多く認められる。刃部の形態は円刃となるものと斜刃となるものが多いが、直刃のものは存在しない。

石材はホルンフェルス製が最も多く、粘板岩製、砂岩製、千枚岩製品がこれに続く。

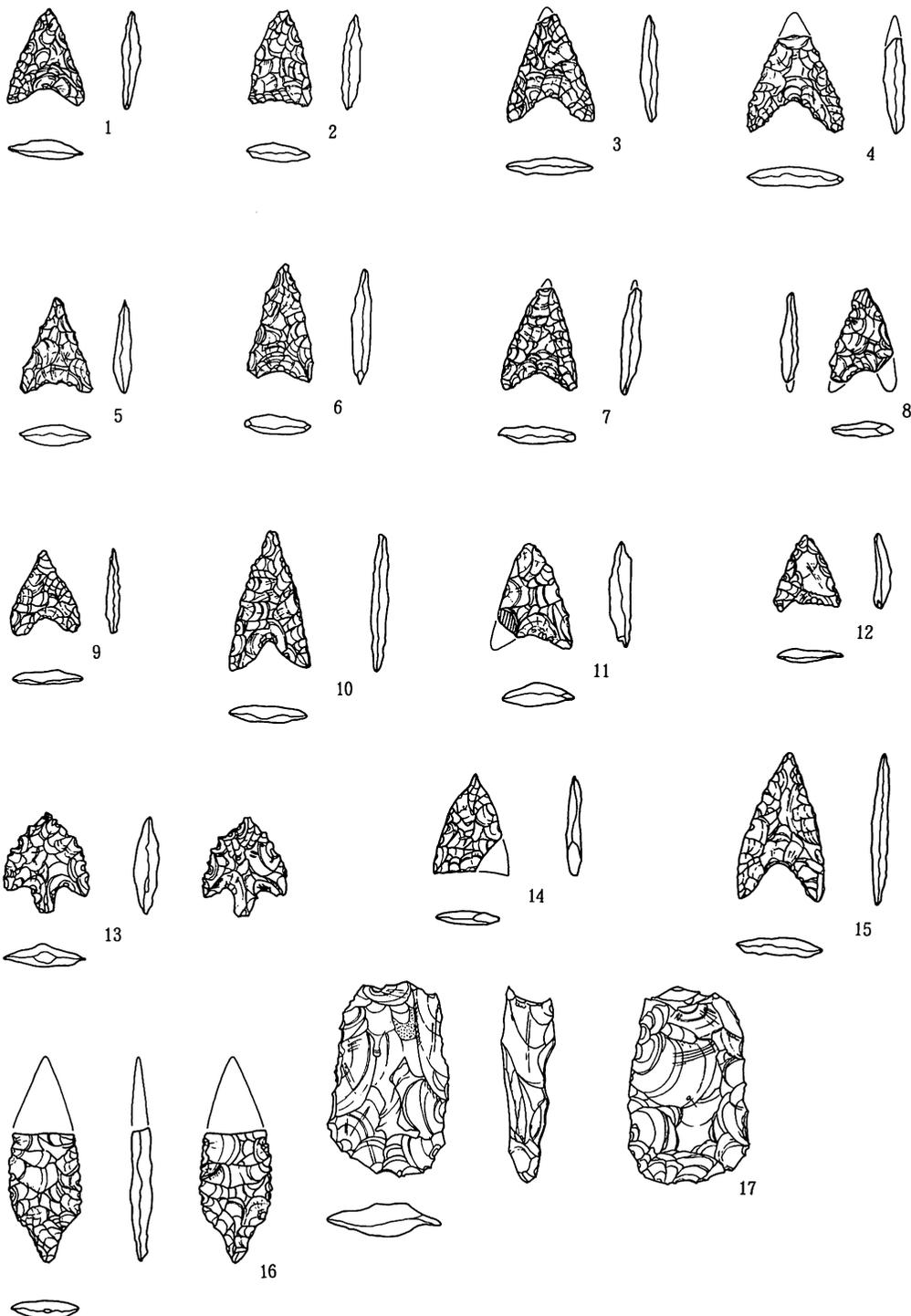
打製石斧は形態から使用時期を判断することはできないが、分銅型の製品については後・晩期の土器群に伴出する可能性がある。

③ 石匙 (第13図1)

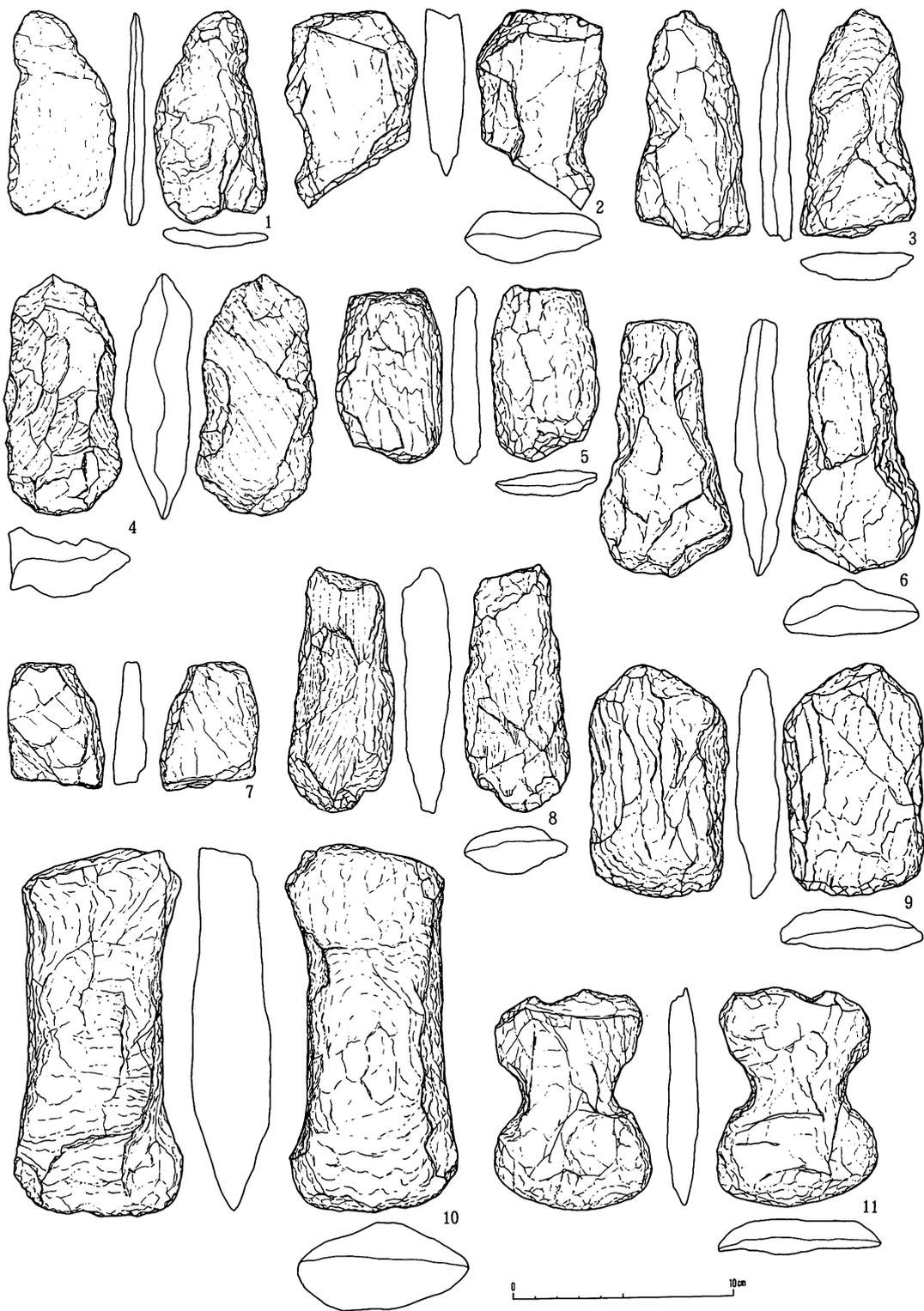
基部の袂りが存在することから石匙として捉えた。ホルンフェルス製、先端部を欠損する。1区N-18グリッド出土。

④ その他 (第12図17)

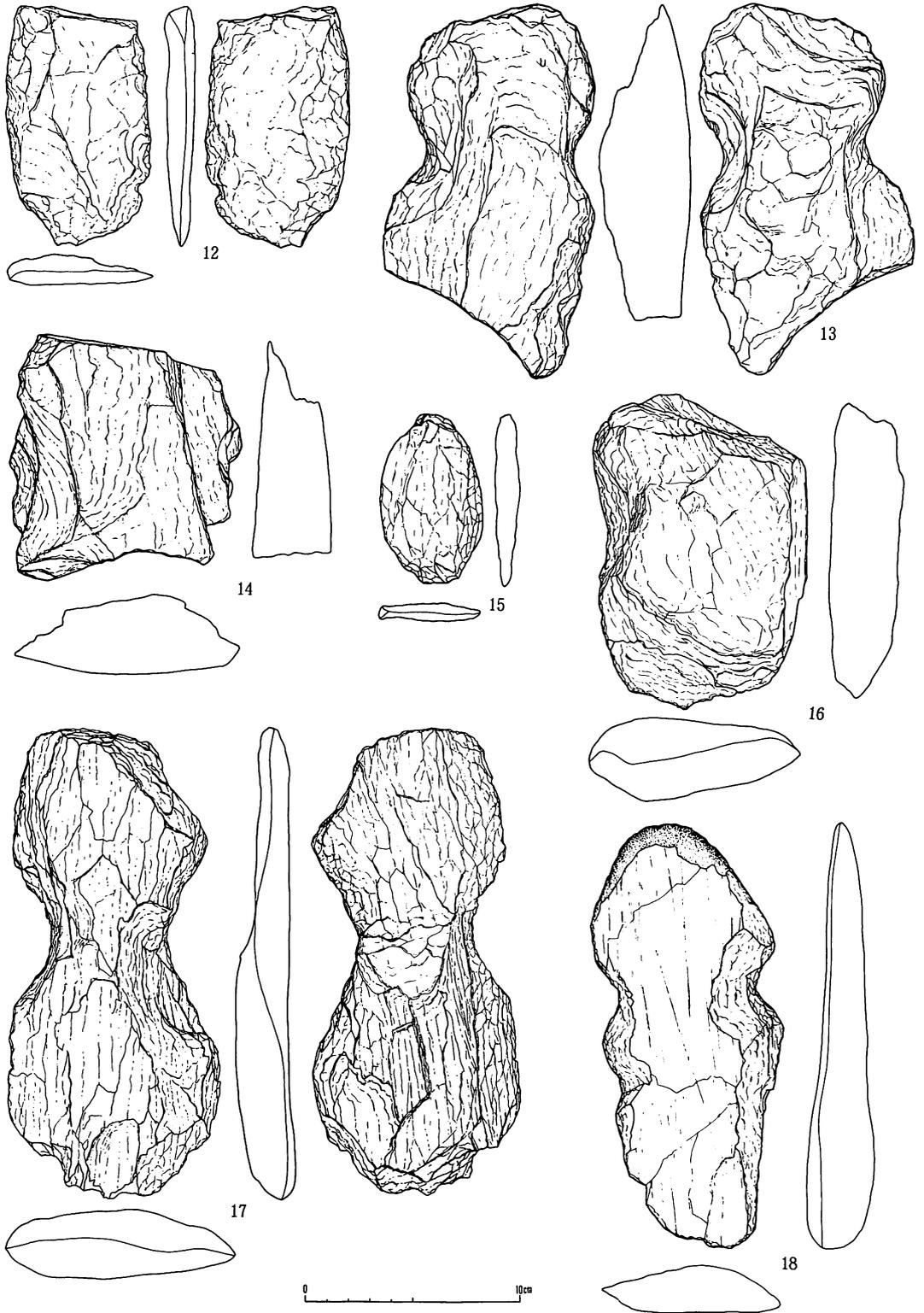
2次加工を持つへら状の剝片である。2次加工は両面に施されているが、加工は全体的に雑で製品として使用されたか否か判断しがたい。黒曜石製、1区N-24グリッド出土。



第12図 石鏃・その他



第13图 打製石斧 (1)



第14图 打製石斧 (2)

表2 石鏃一覧表

図番号	出土グリッド	形 態	長さcm	幅 cm	重さ g	石 材
1	1区C-15	凹基無茎	2.0	1.7	0.7	黒曜石
2	1区G-14	平基無茎	2.1	1.4	0.9	黒曜石
3	1区C-4	凹基無茎	2.3	1.9	1.2	黒曜石
4	1区B-7	凹基無茎	2.0	2.0	1.0	黒曜石
5	1区表土	凹基無茎	2.0	1.5	0.9	チャート
6	1区J-16	凹基無茎	2.5	1.4	1.0	黒曜石
7	1区I-14	凹基無茎	2.2	1.7	1.0	黒曜石
8	1区H-2	凹基無茎	2.0	1.3	0.6	黒曜石
9	1区J-18	凹基無茎	1.8	1.5	0.5	黒曜石
10	1区F-27	凹基無茎	3.0	1.8	1.4	チャート
11	1区G-4	凹基無茎	2.1	1.5	1.3	チャート
12	1区C-26	凹基無茎	1.7	1.4	0.5	黒曜石
13	1区J-17	有 茎	2.2	1.9	1.2	黒曜石
14	2区E-10	平基無茎	2.1	1.4	0.8	黒曜石
15	2区B-3	凹基無茎	3.2	1.9	1.7	珪質凝灰岩
16	1区P-8	有 茎	2.8	1.5	1.9	チャート
17	1区N-24		4.2	2.6	10.9	黒曜石

表3 打製石斧一覧表

図番号	出土位置	形 態	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さ g	石 材
1	1区表土	石 匙	9.7	4.8	0.8	46.0	ホルンフェルス
2	1区M-11	分銅形	9.0	6.0	1.9	132.2	ホルンフェルス
3	1区R-26	撥 形	10.5	5.0	1.3	92.6	粘板岩
4	2区H-9	短冊形	11.0	5.0	3.0	192.0	ホルンフェルス
5	1区O-17	〃	8.0	5.0	1.2	55.0	粘板岩
6	1区N-22	撥 形	11.7	5.8	2.3	132.5	ホルンフェルス
7	1区M-21	不 明	7.7	4.3	1.5	46.5	ホルンフェルス
8	1区N-7	短冊形	11.4	4.8	2.2	123.5	中粒砂岩
9	1区N-27	〃	10.7	6.4	2.0	152.0	粘板岩
10	1区L-11	〃	16.8	7.7	3.7	609.0	ホルンフェルス
11	1区M-27	分銅形	10.1	7.2	1.3	129.5	粘板岩
12	2区表土	短冊形	11.0	6.6	1.3	102.2	ホルンフェルス
13	1区M-21	分銅形	17.1	9.8	4.2	618.0	ホルンフェルス
14	2区E-8	不 明	14.4	10.5	3.6	504.0	ホルンフェルス
15	2区表土	不 明	7.9	4.8	1.1	42.7	粘板岩
16	1区P-7	短冊形	14.5	9.5	3.9	582.0	ホルンフェルス
17	2区I-8	分銅形	21.5	9.5	2.5	526.7	粘板岩
18	1区Q-25	〃	19.4	8.0	3.1	482.0	粗粒砂岩

第IV章 地質調査

山梨県上野原町関山遺跡における地層とテフラ

1. はじめに

本遺跡のある上野原の市街地がのる段丘面は田名原 I 面に相当する。田名原 I 面は、新第三系を基盤にして、それを不整合におおって段丘堆積物である上野原砂礫層（町田ほか，1986）が層厚約40～50mで厚く分布している。田名原 I 面は、始良Tn火山灰（AT:町田・新井，1976）を挟在する主として富士火山テフラからなる約5～7mの厚さの風化火山灰層によっておおわれている。

関山遺跡は、田名原 I 面の南端の崖線に接して位置している。今回は関山遺跡の標準断面において時間の指標となるテフラをみいだすことを目的として分析を行なった。

2. 試料

試料は本遺跡の I - 31グリッドに掘られた深さ約3.4mのトレンチの南壁において採取した。幅10cm、高さ5cm、奥行約5cmの試料を垂直方向に連続して採取し、下位から上方にむかってNo.1からNo.66とした。I～V層は黒褐色～暗褐色の風化火山灰層であり、VI～X層はスコリア質の褐色火山灰層である。地表下約2.1～2.3m付近のⅧ層中に肉眼でも顕著な褐色のスコリア層が認められる。

3. 分析法

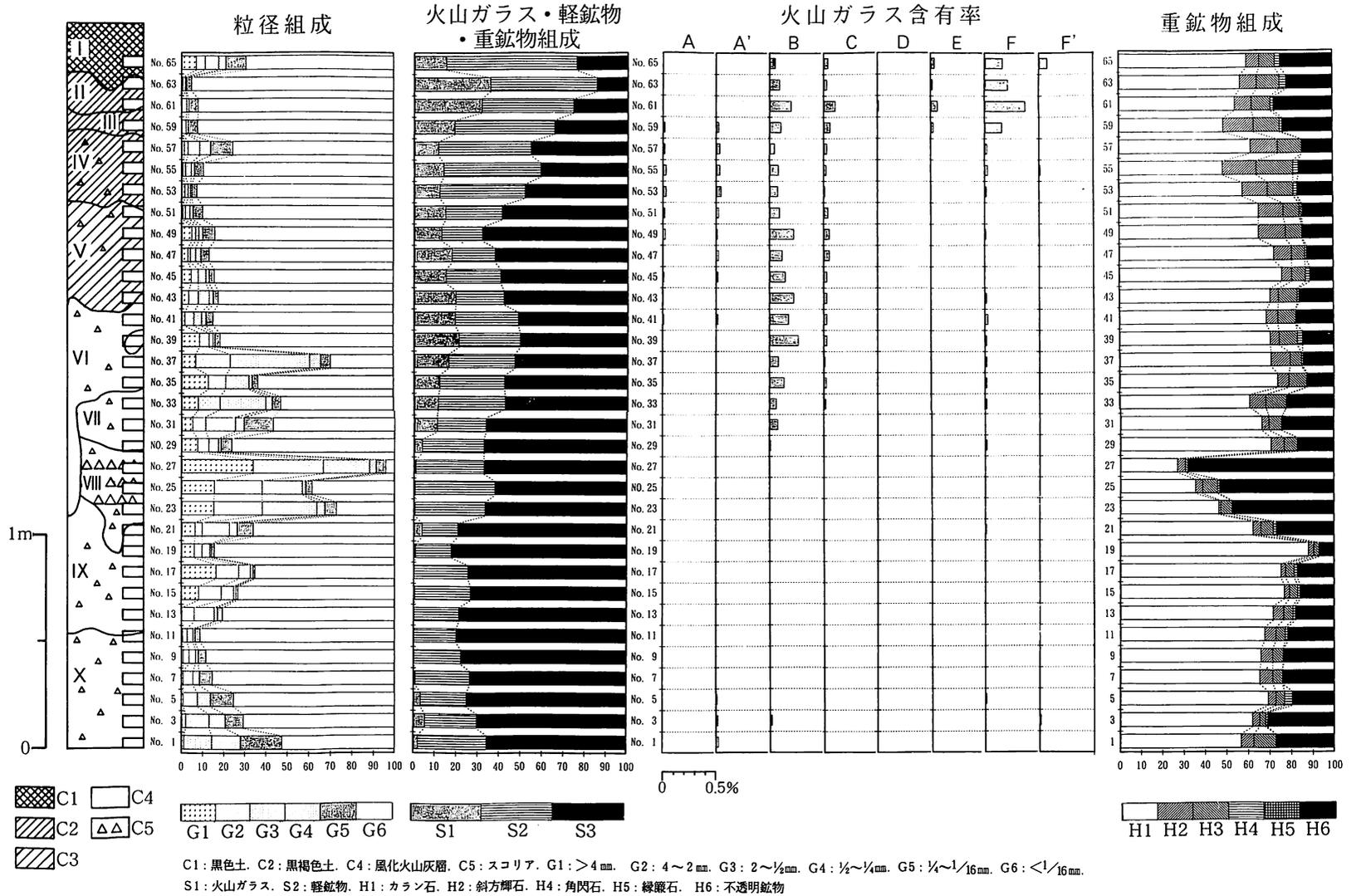
分析試料は、奇数番号からNo.1～No.65の33点を分析した。温ったままの試料約20gを秤量したあと、水を加え、超音波発生装置などを用いて試料の分散をはかり、分析篩（#250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後、分析篩（#5、#9、#60、#250）を用いて、 $>4\text{mm}$ 、 $4\sim 2\text{mm}$ 、 $2\sim 1/2\text{mm}$ 、 $1/2\sim 4\text{mm}$ 、および $1/4\sim 1/16\text{mm}$ の粒径に篩別・秤量し粒径組成を算出した。なお、分析に用いた試料の乾燥重量は、別に同一試料約5～10gを秤量ビンにとり乾燥器で105℃、5時間放置後に得られた乾燥重量から算出した。 $1/4\sim 1/6\text{mm}$ の粒径の砂をスライドガラスに封入した。鉱物粒子の観察は偏光顕微鏡下でおこない、1試料ごとに、例外を除き、火山ガラス・重鉱物・軽鉱物の合計が300粒以上、また風化物やその他の粒子を含めた合計が500粒以上になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）にしたがい、細粒鉱物粒子を多く包有するF型ガラスはF'型として区別した。火山ガラスの屈折率の測定は、新井（1972）の方法に従った。

4. 分析結果および考察

分析結果を表4、第15図に示す。表4は計数した鉱物ごとの粒数を示す。第15図は、粒径組成、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成、形態別の火山ガラス含有率、および重鉱物組成を示す。なお、火山ガラス含有率は、試料単位重量あたりの $1/4\sim 1/16\text{mm}$ 粒径の火山ガラスの割合で表示した（注1）。

表4 関山遺跡テフラ分析計数粒数

試料番号	No. 65	No. 63	No. 61	No. 59	No. 57	No. 55	No. 53	No. 51	No. 49	No. 47	No. 45	No. 43	No. 41	No. 39	No. 37	No. 35	No. 33	No. 31	No. 29	No. 27	No. 25	No. 23	No. 21	No. 19	No. 17	No. 15	No. 13	No. 11	No. 9	No. 7	No. 5	No. 3	No. 1			
A 無色	1	4	2	7	4	10	10	6	4	2	4	1	5	1	1		3	1			1											1	1			
A' 無色		6	2	8	7	12	17	8	2	9	6	1	6	2	3	2				1												2	3	2		
B 無色	10	63	36	34	9	26	25	29	33	41	40	58	52	73	28	39	27	12	4					2	1	1	1				1		3			
B 褐色							1																													
C 無色	7	19	20	19	6	8	4	14	8	20	8	9	10	9	4	7	8							1												
C 褐色																1																				
C 緑褐色	1																																			
D 無色		1	3	1																																
E 無色	7	15	12	8	1	1			1			1				1																				
F 無色	16	101	63	50	5	10	6	3	2	4	3	5	9	6	7	5	8	1	6	1		1	2								1	1				
F 緑褐色	14	38	4	1																				1	2							1				
F' 無色	3	1		2		4																					1							2		
F' 緑褐色	11	2																							1											
石英 + 長石	284	347	190	322	120	230	212	109	75	87	103	85	126	122	81	137	128	30	87	39	114	54	27	75	120	144	67	73	73	76	34	40	33			
カンラン石	67	58	62	115	77	100	147	157	171	192	181	155	149	151	98	192	141	58	142	22	67	51	79	327	269	311	178	200	170	142	82	72	38			
斜方輝石	7	8	9	34	16	33	30	28	33	22	11	9	12	9	12	14	18	3	12	3	6	1	5	10	8	10	12	15	14	13	4	4	4			
単斜輝石	8	11	10	28	14	35	30	17	20	16	15	19	18	18	7	21	22	5	12	1	13	6	7	8	14	15	11	13	12	10	5	3	7			
角閃石	3	3	2	3		5	5	1	1	1	5	1		5	1	1				1	2		2	2	6	4	3	4	1		4	1				
酸化角閃石								1		1																										
緑簾石								1																												
不透明鉱物	27	22	31	55	18	33	42	35	37	33	26	36	38	31	20	32	51	21	33	56	100	52	34	24	60	64	44	63	60	52	23	36	18			
黒雲母	1	2	1		2	3	2	3	2		1	1		2	2	1	1	2		2	1					1		2		1	3	3	1			
その他	1268	971	352	660	1599	800	314	938	442	887	232	296	522	234	1182	342	1120	2001	1349	1270	1149	1455	1516	177	323	204	289	160	180	1351	1376	1181	1458			
合計	1735	1672	799	1347	1878	1310	845	1350	831	1315	635	677	947	663	1446	795	1527	2134	1647	1394	1453	1620	1676	627	801	755	604	530	510	1647	1536	1349	1561			



第15図 関山遺跡の柱状図、粒径組成、火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成、火山ガラス含有率、および重鉱物組成

Ⅲ層上部からⅠ層にかけてのNo.59～65において、No.61を極大としてF型無色火山ガラスが濃集する。F型火山ガラスは発泡が細かく、ほとんど包有物をもたないが極めてまれに斜方輝石・角閃石を包有する。発泡の良好な繊維状に引き伸ばされた薄手のE型火山ガラスを伴う。やや孔壁が厚いものも含まれる。火山ガラスの屈折率は、 $n = 1.490 \sim 1.504$ （主要レンジ1.500～1.502）と幅の広いレンジを示し、特に低屈折率のガラスが含まれていることが特徴である。Ⅲ・Ⅳ層は縄文の包含層であり、Ⅲ層は縄文時代後期・晩期の包含層とされる。このように層位とテフラの諸特徴からこのテフラはカワゴ平軽石（Kg）と考えられる。テフラの降灰層準の認定については、特定テフラ粒子の含有量のピークの層準をもって降灰層準と認定される場合が多い（町田・新井、1983；竹村・檀原、1988）。さらに早津（1988）は、テフラ粒子の最濃集部の下限が降灰層準にほぼ一致することを示している。今回の場合、No.61がピークを示していることから、Kgの降灰層準はⅢ層上部からⅡ層下部付近に推定される。

Kgは、天城山カワゴ平火口を給源とする発泡のよい降下軽石で、給源から北および西方に特異な分布を示し、噴火年代は2,800～2,900年前とされている（町田ほか、1984）。遺物との関係では本層の下位から縄文後期の称名寺式土器・加曾利B式土器・堀の内式土器などが、上位からは縄文晩期大洞A式土器が出土している（町田、1980）。本遺跡は給源の天城山から北方に約80 kmに位置しており、従来しられていたKgの分布域（日本第四紀学会、1987）より約20 km北側に発見されたことになる。縄文時代の指標テフラとして山梨県東部地域のより広い範囲で今後Kgが見いだされることが期待される。

No.31から最上部のNo.65までB型ガラスがC型ガラスをともなって低率ながら連続して出現するガラスは無色の厚手であり、その屈折率はNo.37において $n = 1.496 \sim 1.505$ （主要レンジ1.500～1.502）である。ガラスの形態・屈折率の特徴から、これらの火山ガラスはUGに由来するものと考えられる。UGは、上杉ほか（1980）が富士山東麓地域のテフラ層中に報告した3層準のガラス質テフラTNP-I～ⅢうちのTNP-Ⅲに相当する（遠藤・鈴木、1980；山路ほか1982）。UGは、北関東の浅間-板鼻黄色軽石（As-Y P）中の軽石型火山ガラス濃集部に相当し、その降下年代は1.3～1.4万年前と推定されている（町田ほか、1984）。今回の場合No.39においてB型ガラスが極大を示すがあまり顕著でないことから、限定した狭い範囲を降灰層準として推定することは困難である。したがってここではUGの降灰層準をⅦからⅥ層下部にかけての広い範囲としてとらえておきたい。

No.21-27のスコリア層は、発泡中程度、分級中程度、最大粒径約20mm、平均およそ3～10mmで、褐色に風化した細粒のマトリックスをほとんど含まない。また、本スコリア層は、粒径組成が急激に粗粒になり、重鉱物組成において不透明鉱物が増加し、相対的にカンラン石が減少し、火山ガラスはともなわず、軽鉱物が他の層準より若干増加する傾向がみられる。以上の諸特性、UGの下位であること、および後述するATより上位にあることなどから本層は古期富士テフラのうちでかなり後期のスコリア層と考えられる。

ATを特色づける火山ガラスは、1.500に屈折率のモードをもち、形態はバブルウォール型（町田・新井1976）を示す。これは吉川（1976）Ha・Hb型、遠藤・鈴木（1980）のA・A'型に

あたる。本遺跡の位置する田名原 I 面は A T を含む富士火山起源のテフラ層が分布するとされているが、本遺跡の柱状断面では A T は検出されなかった。従って今回のトレンチにみられる地層は A T 層準の深さまで達していないと考えられる。

注 1 ある形態 x 型の火山ガラス含有率 A_x は次の式で算出した。

$$A_x (\%) = (C/B) \times (E_x/D) \times 100$$

ただし B : 試料の乾燥重量 (g)

C : $1/4 \sim 1/16$ mm 粒径砂分の重量 (g)

D : 計数した $1/4 \sim 1/16$ mm 粒径粒子の総数

E_x : 計数した x 型火山ガラスの粒数

(文責 河西学)

引用文献

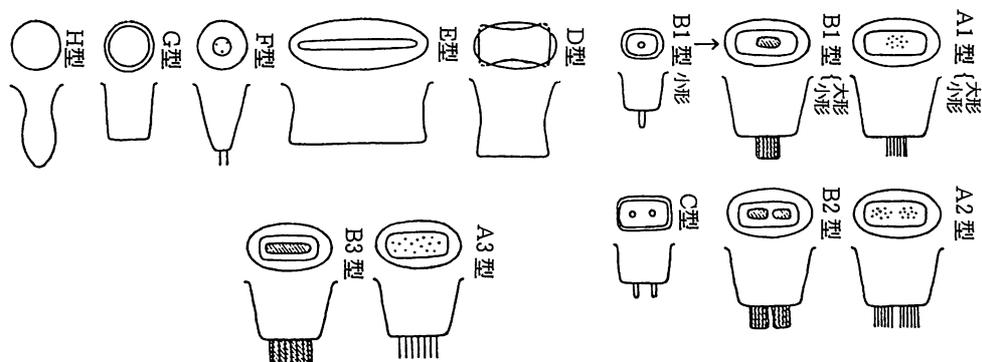
- 新井房夫 (1972) 「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究—」『第四紀研究』11, 254—269.
- 遠藤邦彦・鈴木正章 (1980) 「立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層」『考古学と自然科学』13, 19—30.
- 早津賢二 (1988) 「テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロロジー—A T にまつわる議論に關係して—」『考古学研究』136, 18—32.
- 町田洋 (1980) 「富士テフラと古代遺跡」『考古学ジャーナル』178, 2—11.
- 町田洋・新井房夫 (1976) 「広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—」『科学』46, 339—347.
- 町田洋・新井房夫 (1983) 「広域テフラと考古学」『第四紀研究』22, 133—148.
- 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) 「テフラと日本考古学—考古学研究と關係するテフラのカタログ」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』865—928.
- 町田洋・貝塚爽平・森脇広・久保純子・河村洋子・叶内敦子・吉山昭・宮内崇裕 (1986) 『相模原の地形・地質調査報告書 (第 3 報)』, 相模原市地形・地質調査会, 1—96.
- 日本第四紀学会編 (1987) 『日本第四紀地図』東京大学出版会.
- 竹村恵二・檀原徹 (1988) 「土壌中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年—温度変化型屈折率測定装置を使用して—」『考古学と自然科学』20, 35—50.
- 上杉陽・米沢宏・開原志寿恵・中村仁子・重藤伸子・岩井郁乃 (1980) 「富士山東麓地域の古期富士テフラ累層」平塚市博物館研究報告『自然と文化』3, 33—46.
- 山路進・鈴木正章・遠藤邦彦・大沢真澄・二宮修治・鈴木和博・新井房夫・宮地直道 (1982) 「関東地方における立川期テフラ諸特性といくつかの問題」『日本第四紀学会講演要旨集』12, 54—55.
- 吉川周作 (1976) 「大阪層群の火山灰について」『地質学雑誌』82, 497—515.

第V章 ま と め

今回の発掘調査区は、既に報告されている上野原インターチェンジ導入口部分（I区）に続くもので、立地や事前の分布調査ではI区より遺構が多いと予測されました。しかし、調査の結果検出された遺構は縄文時代を含む土壌6基と終戦直後に掘削された貯蔵穴が1基のみであった。遺物の包含層は、第IV層から第V層にかけて縄文時代の土器片、石鏃、打製石斧などの遺物が散発的に検出されている。

検出された遺構中特異なものとして、6号土壌がある。土壌の上部はやや摺り鉢状に掘り込まれ、下部を直壁で深く掘りあげている。土層の堆積状態は基本的には自然堆積であるが、基底直下の数層について非常に締まりが強く、人為的に貼ったか、あるいは上部から一挙に埋没した形跡が認められる。遺構内部から出土遺物がないためその使用時期については不明であるが、使用目的は中型獣の捕獲に使用された陥穴の可能性が高いと考える。

陥穴はシカやイノシシ等の動物専用の罠で、トラップ・ピット（Tピット）とも呼ばれ、これまで北海道、東北、関東甲信越、岡山、鳥取などの各県で発見されている。地方別に見ると、北海道と東北地方、本遺跡に隣接する関東地方では多摩丘陵から下末吉台地にかけて多数発見されている。また、本県では北部の八ヶ岳南麓の丘の公園遺跡群の中からも多く発見されている。これらの陥穴は遺構の性格上伴出遺物を伴わず、使用時期の確定が困難なものもあるが、これまで報告された中では縄文時代草創期のものが最も古く、新しいものは中・近世に属するとされている。ここでは横浜市霧が丘遺跡の陥穴群の分類を行なった今村啓爾氏の分類を参考に掲げておく。底部施設の有無を重視すればこれら陥穴の形態は、底部に杭の様な棒を突き立てたか、その痕跡の無いものかに2分される。杭状の棒の痕跡は本県の丘の公園内の遺跡でも



第16図 陥穴の分類（今村 1973）

多く確認されているが、これは落ちた動物が跳び上がるのを防ぐための仕掛けで、必ずしも動物に致命傷を負わせる為のものでは無いようである。本遺跡の6号土壌は底部形態が平坦で、棒等の痕跡を全く持たないタイプで、土壌の規模も丘の公園内遺跡群と比較して大型である。これまでの発見例では、これらの陥穴はけもの道に沿って単独または少数造られる場合と、動物が多く集まる場所の近くに一定間隔で造られ群をなす場合とが知られているが、本遺跡では広範囲の調査にもかかわらず1基だけ検出されておりけもの道の上に仕掛けられたものと判断したい。

調査範囲内の発掘では、縄文時代のわずかな土壌と石鏃、打製石斧等の石器類が散在し、この地点が縄文時代は集落からやや離れた外縁的な性格をもった遺跡と考えられる。I区の県道部分の調査では縄文時代中期の住居址が1軒検出されているが、ここでも大規模な集落は望めず、当時の拠点的な集落は河岸段丘面とその北側山麓部との接点に沿う遺跡群に求められる。6号土壌をトラップ・ピットとして記述したのもその形態的類似点ばかりでなく、遺跡そのものの性格からも妥当性があると考えたからである。さらに推論が許されるならば、本遺跡は縄文時代における小集落とその周辺の狩猟や木の実・根茎類の採集活動の場でないかというのが今回の調査を通しての結論である。

参考文献

- 文化庁 『全国遺跡地図 山梨県』 1981
- 磯貝正義ほか 『角川日本地名大辞典19 山梨県』 1984 角川書店
- 坂本美夫 「甲斐の郡(評)郷制」 『研究紀要1』 1983 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 八巻與志夫 「古代甲斐国の郷配置の基礎的操作」 『山梨考古学論集』 I 1986 山梨県考古学協会
- 上野原町誌編纂委員会 『上野原町誌』 1975
- 大月市史編纂委員会 『大月市史』 1978
- 山梨県教育委員会 『関山遺跡』 I 1988 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第36集
- 今村啓爾 「陥穴(おとし穴)」 『縄文文化の研究』 2 1983 雄山閣
- 霧ヶ丘遺跡調査団 『霧ヶ丘』 1973
- 山梨県埋蔵文化財センター 「丘の公園第5遺跡見学会資料」 1988
- 山梨県教育委員会 『八ヶ岳東南麓遺跡分布調査報告書』 1986 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第14集

版 圖



図版 1 関山遺跡上空航空写真



標準土層



1区作業風景



作業風景



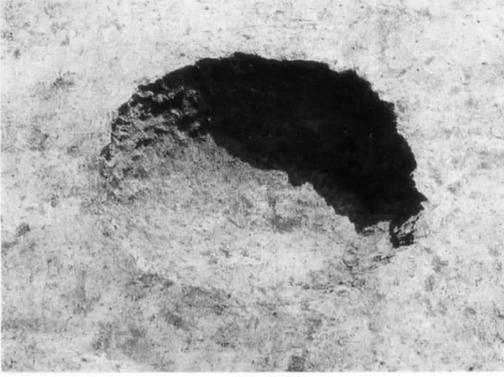
1区全景（西側より）



1区全景（東側より）



2区全景



1号土坑



2号土坑



3号土坑



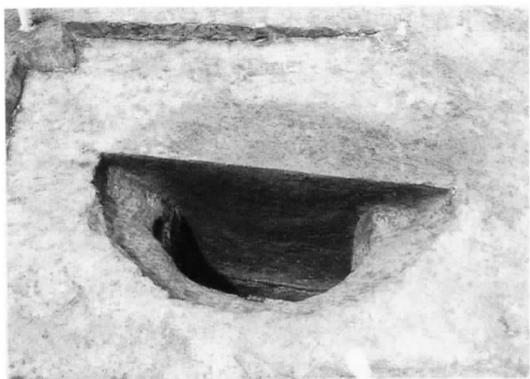
5号土坑



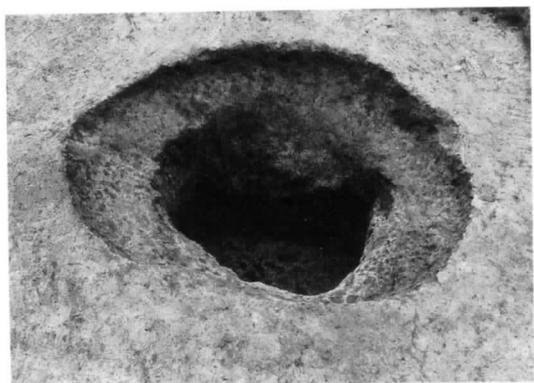
1区東側トレンチ



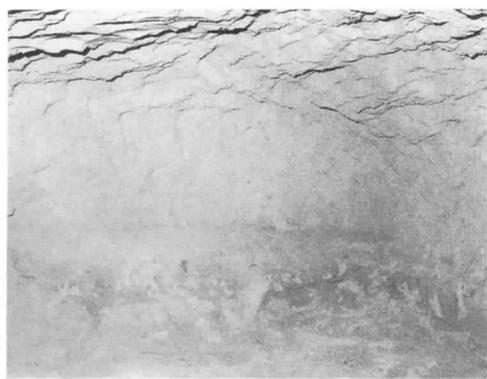
風倒木痕



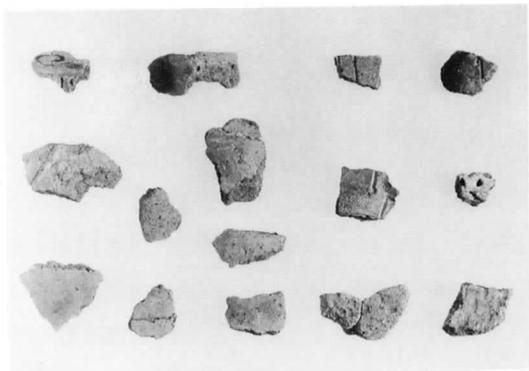
6号土坑



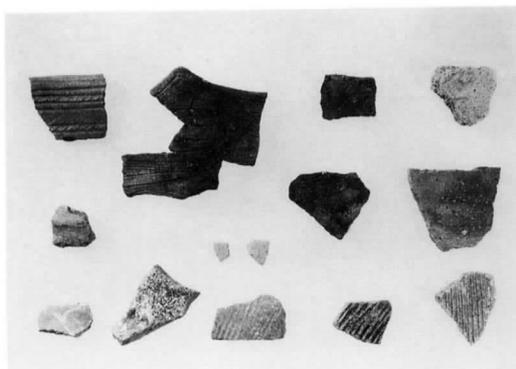
貯藏穴



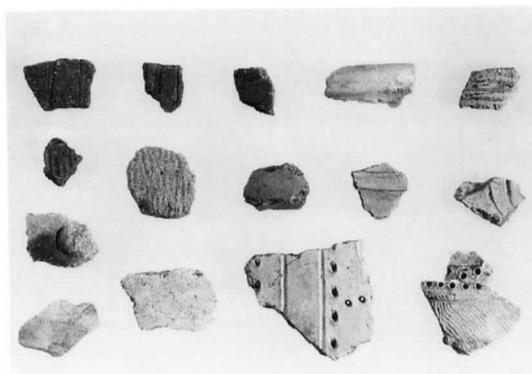
貯藏穴内部工具痕



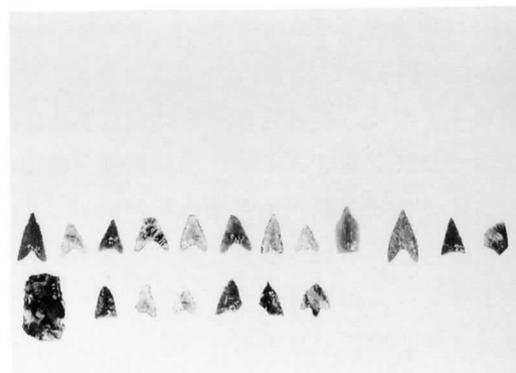
遺構內出土土器



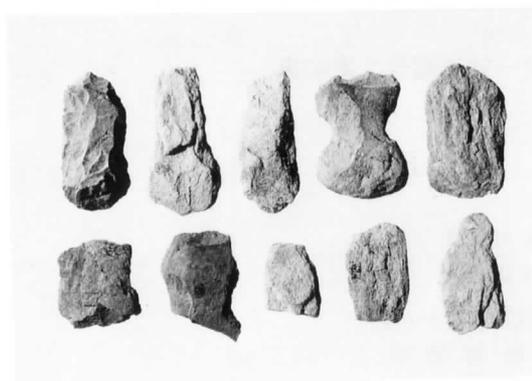
遺構外出土土器



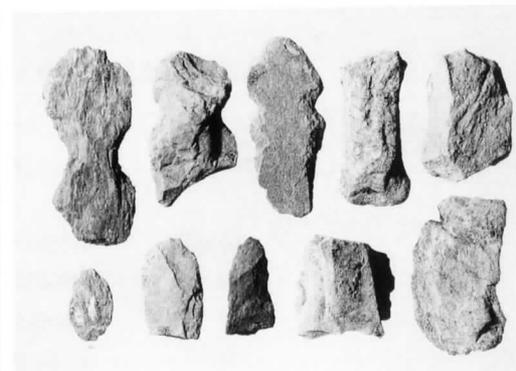
遺構外出土土器



遺構外出土石器



打製石斧



山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第40集

関 山 遺 跡 II

印刷日	昭和63年9月25日
発行日	昭和63年9月30日
編 集	山梨県埋蔵文化財センター
発行所	山 梨 県 教 育 委 員 会
印刷所	(株) 峡 南 堂 印 刷 所

